

試用版

妹に
性労働を
させるべし



「今日はどうするの？」
浴室から出てきた妹は、ベッドに腰を下ろす。

「よし！」
俺はベッドの近くに椅子を置き、それに座った。

「前に来て」
妹を自分の両脚の間に跪かせる。眼前にある勃起した男性器をまじまじと見てくる。

「どうすんの？」

「胸で挟んでもらえますか？」
「ふふ。パイズリってやつ？」

「そうです」

「わかった」

俺は腰を前へずらし、性器を突き出した。妹は身体に巻いているバスタオルを外し、乳房で陰茎を挟み込もうとする。手で両脇から押された柔らかい肉に、俺は埋没した。



「こんなの気持ちよくないんじゃないのー？」
妹は呆れたような口調でそう言いながら、乳房を上下させて、硬くな
った肉棒をしごく。



「いや、いい感じだよ」
「ほんとに？フェラでもいいんだよ」
「じゃあ唾、垂らしてよ」
口元から胸の谷間に、粘液が落ちる。肌と肌の滑りが良くなって、
心地よい。
「気持ちいいよ」
「イケる？」
「うん、もっと激しくして」
妹は乳房を掴んだ両腕を高速で動かし、挟んでいる肉棒を責め立て
る。

「出そう」
「いいよ」
「んっ、ああっ、あー」
張り詰めた肉棒の先端から、白濁の粘液が噴出し、胸の谷間に溢れる。
「おっ、いっぱいだね」



「はあはあ。お掃除して」
俺は立ち上げり、精液まみれの男性器を妹の口元へ寄せる。

「んあっ」
大きく口を開け、受け入れる。

「んっ、んっ、ん」
肉棒に纏わりついた、精液を舌で舐めとり、先端を吸ってくる。気持
ちいい。

「もーおっひくなっは」
陰茎は、すでに硬さを取り戻していた。

「このままフェラして」

「んん」

要請に答えた舌が、裏筋を舐め、亀頭の先端をねぶる。
かわいい妹だ。ちよっと虐めたくなってくる。

「もつと奥まで、入れてみようか？」

「んん？」



俺は妹の頭を掴み。引き寄せる。口内の奥まで侵入する。

「んッんッん」

苦しそうだ。一度、引き抜く。

「んはっ、はっ」

「もう一回、いくよ」

「くるひい、んっ」

「ああ、気持ちいい」

「んっんっんっ」

こうしていると、妹を征服したような気分になって興奮する。俺は自分の

中に猛烈な性的高まりを感じる。

「イク！」

「んっ」



喉に射精する。妹が喉を動かしているのがわかる。
最高だ。



射精が終わったので、陰茎を口から引き抜く。



「んあつ、あはあ、はあ」
「お兄ちゃん、ザーメン美味いだろ？」
妹は口を開けて、口内をこちらに見せる。

唾液とは違う白い塊が、舌の上

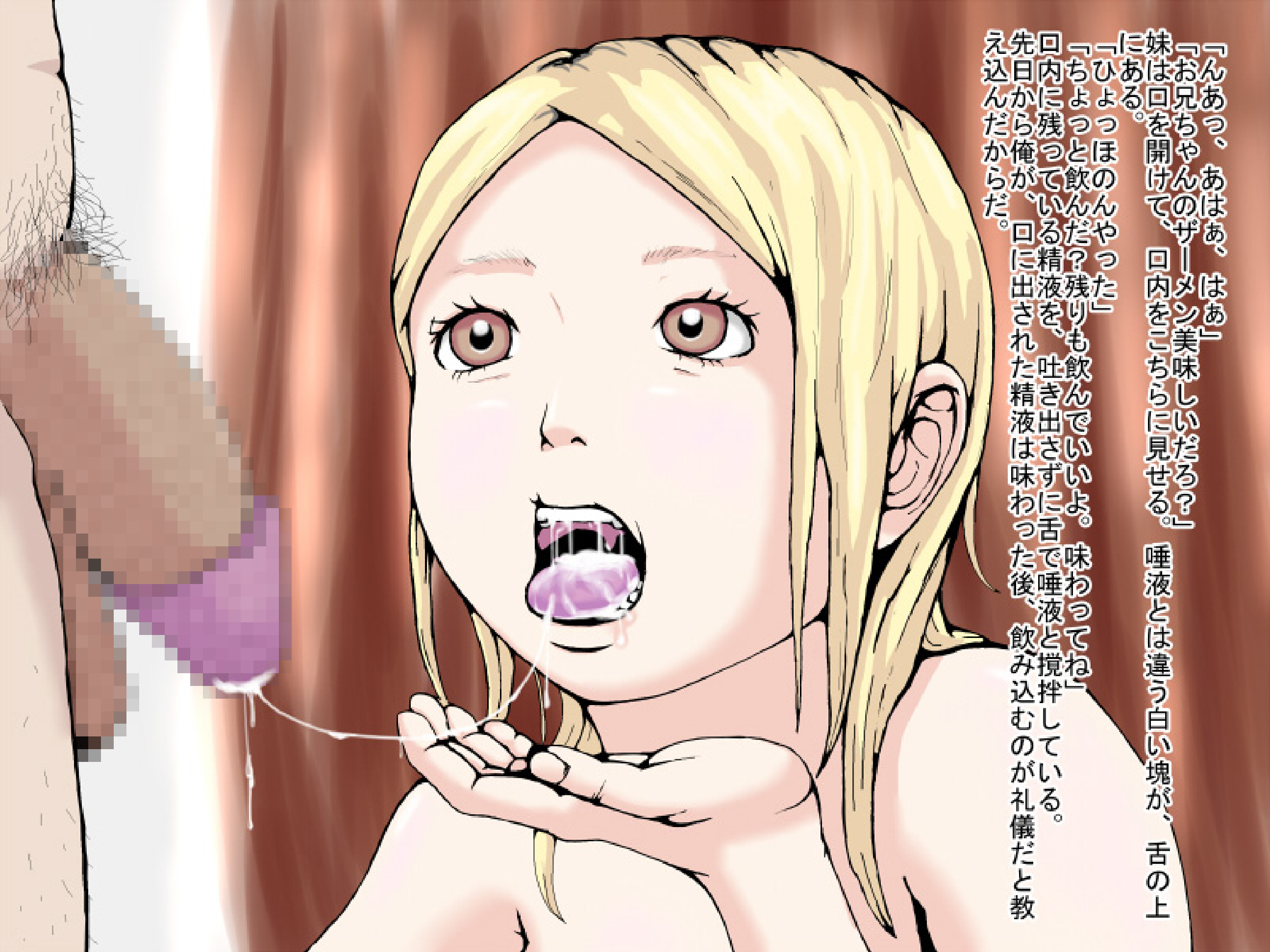
にある。

「ひよつほのんやった」
「ちよつと飲んだ？残りも飲んでいいよ。味わってね」

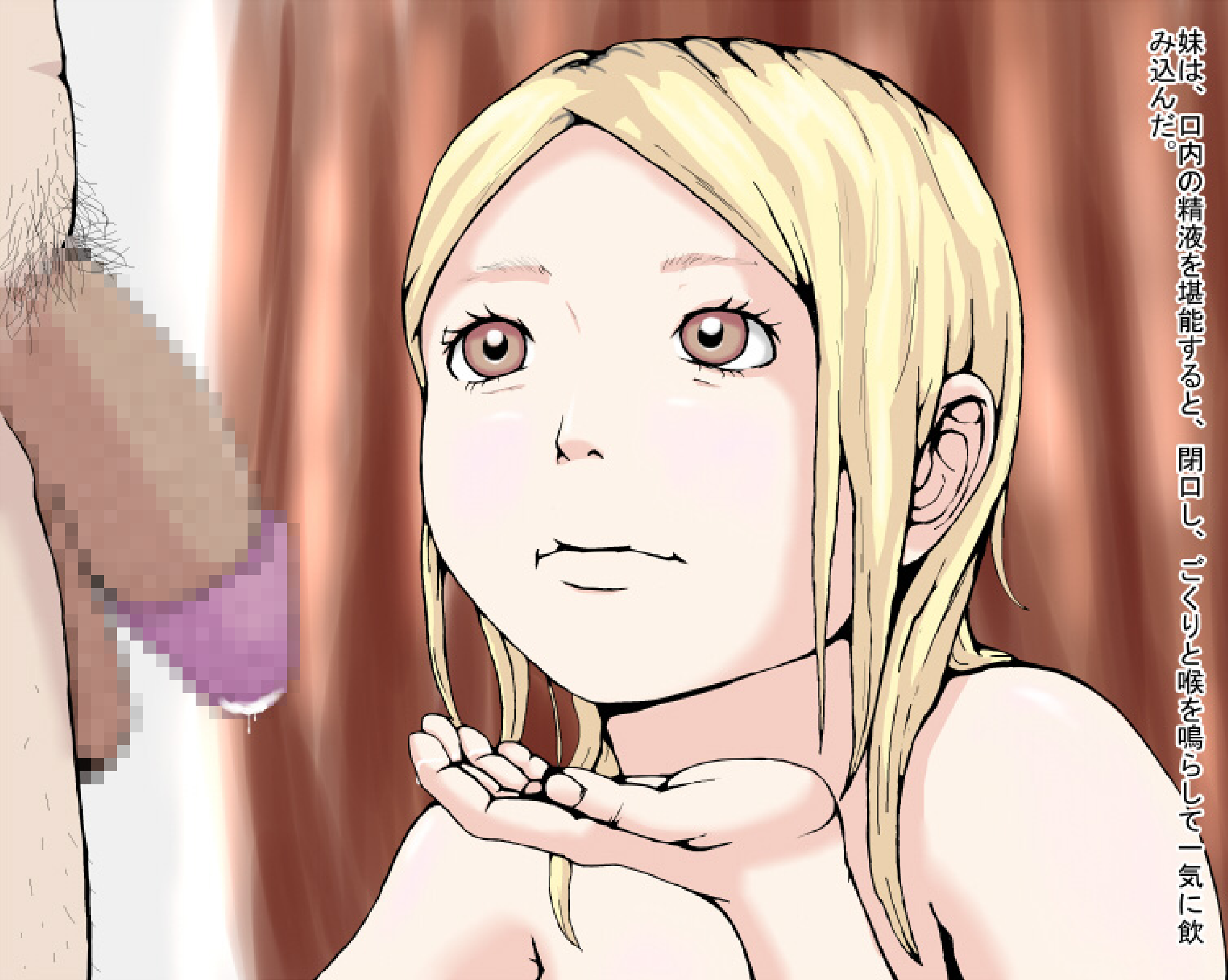
口内に残っている精液を、吐き出さずに舌で唾液と搅拌している。

先日から俺が、口に出された精液は味わった後、飲み込むのが礼儀だと教

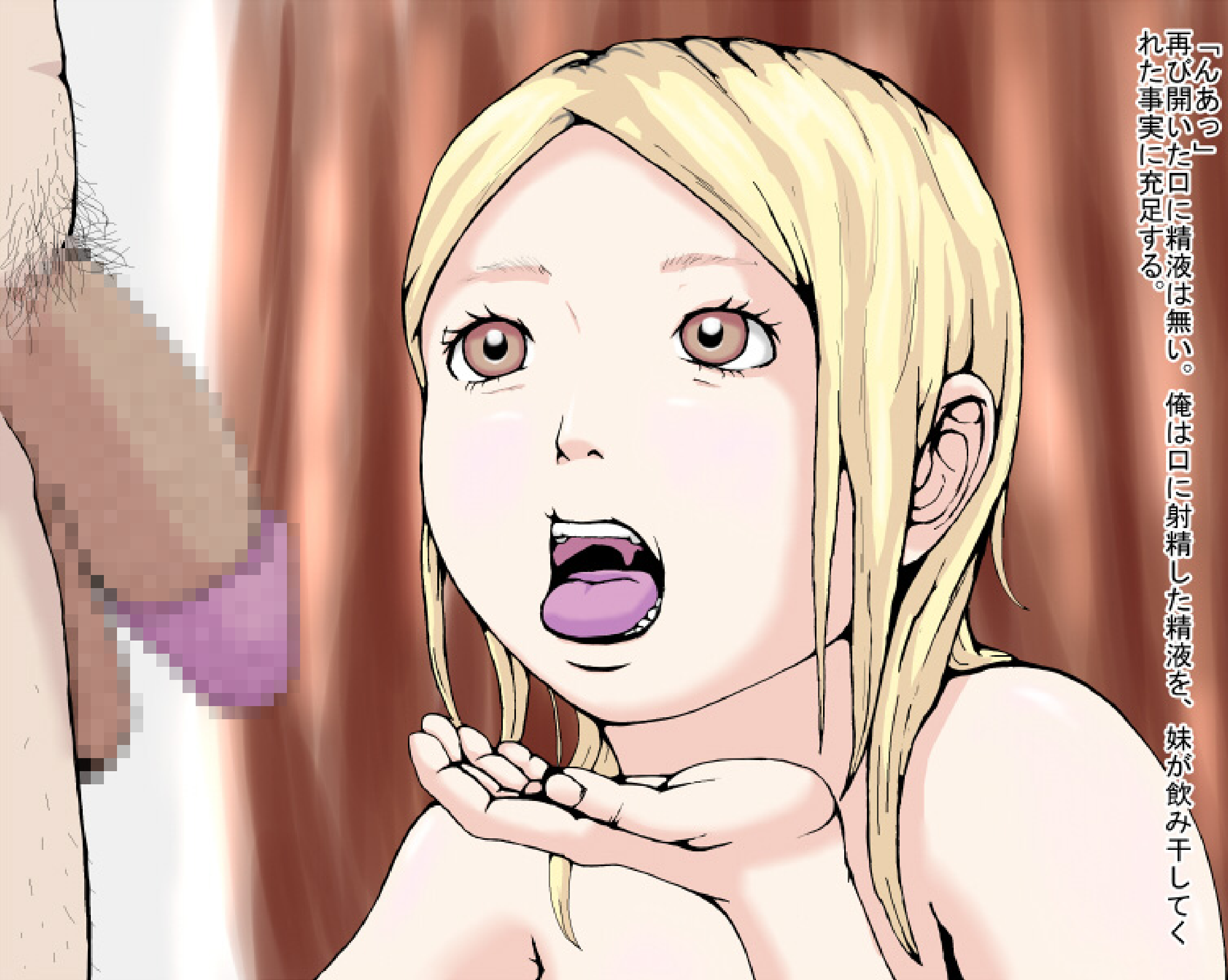
え込んだからだ。



妹は、口内の精液を堪能すると、閉口し、ごくりと喉を鳴らして一気に飲み込んだ。



「んあっ」
再び開いた口に精液は無い。俺は口に射精した精液を、妹が飲み干してく
れた事実充足する。



「今日はもう終わり？」
「兄ちゃん、頑張る！」
俺は妹の身体を抱き、ベッドに乗る。四つん這いにさせて、背後から腰を掴む。「いいわゆるバツグンという体位だ。」
「お兄ちゃん、精力強すぎ、絶倫ってやつ？」
「一方的に気持ちよくしてもらっただけじゃダメなの！相手のことも気持ちよくする」それが正しいセックスなの！」
「自分がやりたいだけでしょ。ふふふ」
「そうだな、俺は、精力が尽きるまで性交のチャンス逃したくはないのだ。俺はすでに二回射精しているが、大丈夫か？俺のチンコ！萎んだ陰茎を妹の割れ目にあてがう。ぬるりとしてるのがわかる。先の猥褻行為で妹はその気になって、濡れているようにある。」
妹の身体が生殖を望んでいるのだ。
俺は勃起した。挿入する。

「んう」妹が息を漏らす。
「パンパンパンパンパン。腰を何度も妹の尻に打ち付ける。」
「ちよっと、兄ちゃん。ゴムつけてよお」
「三回目だから、もうあんまり出ないって、たぶん」
「えー。いやだよお。もう、ちよっと待って」



妹はベッドにうつ伏せになって逃げようとするが、俺は逃さない。両腕を上から抑え込んで拘束する。

「もう。しょうがないなあ」

「こういうのを、寝バックっていうんだぜ」

尻に押し掛かるようなかたちで挿入を続ける。

「あ。ああああ」艶めかしい喘ぎ声が聞こえる。

「やっぱ、生のチンポ気持ちいいだろ？」

「そんなこと」

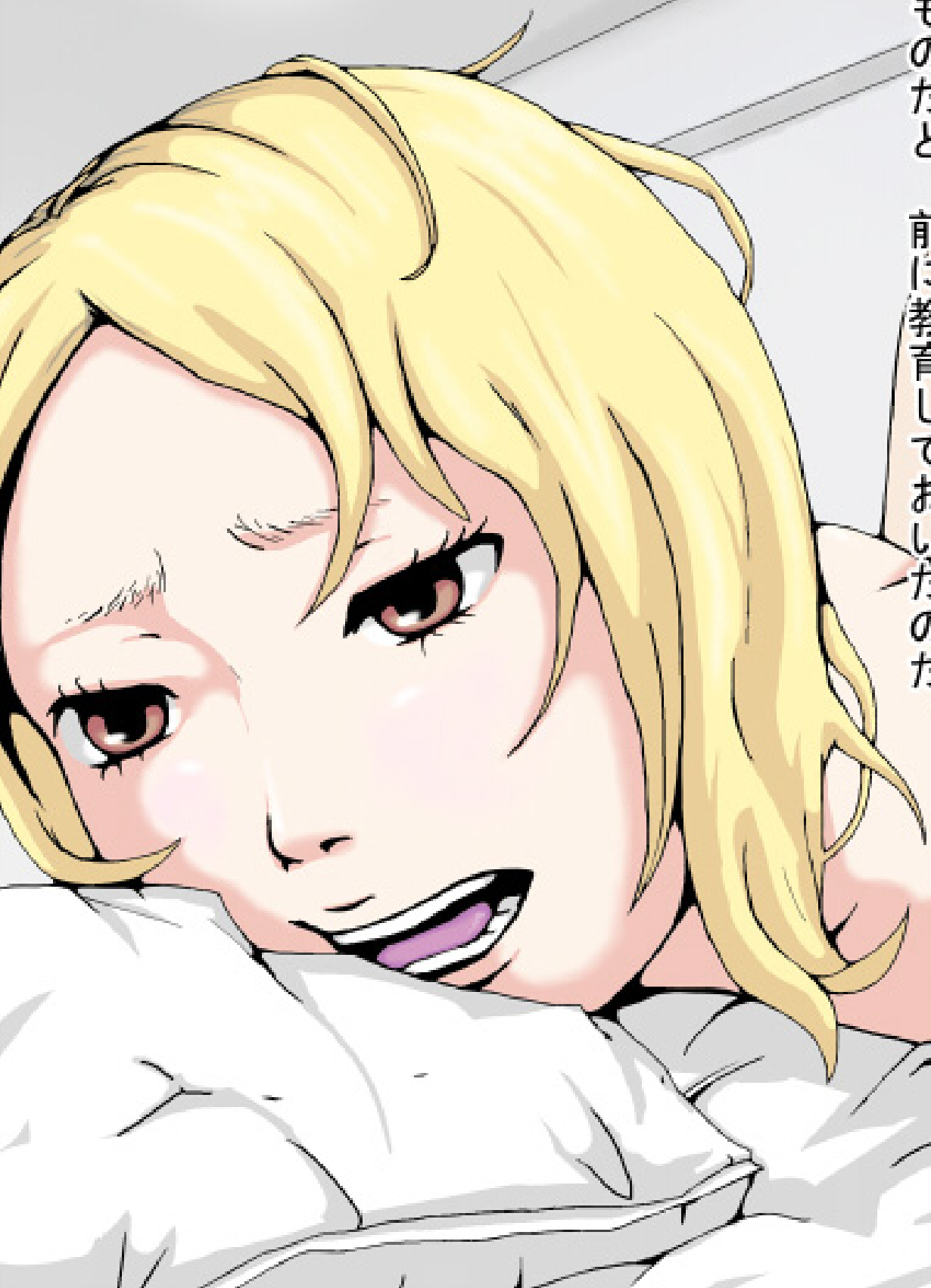
「気持ちいいでしょ？」

俺は腰を振って、割れ目に何度も肉の杭を打ち付ける。

「んああっ。お、お兄ちゃん、チンポ気持ちいいですう」

「よし！」

妹は俺の望んだ言葉を言ってくれた。セックスはこういう卑猥な言葉を言うものだ。前に教育しておいたのだ。



射精した。ドクンドクンとペニスが脈打っている。膣から引き抜くと、どろりとした白濁液が出てきた。妹の生殖器はちゃんと精液を搾り取ったようだ。

「……………なかにだしたの？」

「お尻に掛けとくよ」

俺は粘液まみれのペニスを尻に撫でつけた。先端から少しだけ残っていた精液がながれ出た。

「……………」

